

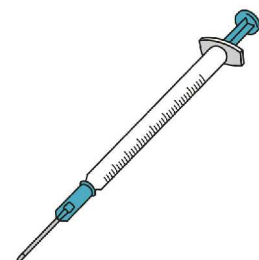
会員発表紹介

消化管閉塞による嘔気・嘔吐に対するオクトレオチドの効果

¹中通総合病院 緩和ケアチーム、²中通総合病院 薬剤部
小池 善和¹、小松 昭子²、安藤 秀明¹、堀 正樹¹、
田口 恵美子¹、三浦 ゆり子¹、挽野 仁¹

【はじめに】オクトレオチドは消化管閉塞による嘔気・嘔吐に対する有用性が認められている。今回、悪性腫瘍に伴う消化管通過障害症例に対してオクトレオチドを使用し、その効果を検討した。【対象】2004年9月から2005年2月まで癌による消化管閉塞のために嘔気・嘔吐を起こしていた患者9名。【方法】投与量は1日300 μ gとし、症状により増減した。薬剤効果は、JCOG Toxicity Scale による Grade 分類で評価した。【結果】9例全例で Grade の低下が認められ、うち7例が Complete control、2例が partial control であった。オクトレオチド投与中、または投与開始と同時に胃管を挿入したのは4例で、うち2例は挿入から1週間以内に胃管を抜去することができたが、残り2例は嘔気・嘔吐は改善したものの胃管からの排液量が減らず継続留置となった。増量に至った症例は2例であった。1例は300 μ g/日（分2、皮下投与）で嘔気・嘔吐は抑えられていたが、1ヶ月経過後症状が再出現したため600 μ g/日に増量したところ嘔気・嘔吐と共に短腸症候群による水様性の下痢も改善した。もう1例は200 μ g/日（分2、30分点滴静注）から開始したが効果なく、300 μ g/日に増量し若干の改善が認められた。皮下注から持続点滴静注に、または持続点滴静注から皮下注へ投与経路を変更した症例では効果に差は見られなかった。有害事象として初回急速静注した症例において一過性の強い嘔気を認めたが、2回目以降は皮下投与とし効果が得られた。また、投与後LDH及びTBの上昇が1例、ALP及びTBの上昇が1例に認められたが、両症例とも肝門部へのリンパ節転移を伴っていたため、純粹にオクトレオチドによるものとは言いきれなかった。【結語】オクトレオチドは、末期癌の消化管閉塞による嘔気・嘔吐の改善に有効であり、下痢症状に対する効果も期待できる。投与経路は持続皮下注、持続点滴静注、1日2回の皮下注で効果的であったが、血中濃度推移を考えると持続皮下注、もしくは持続点滴静注が最も望ましいと考える。用量は300 μ g/日から開始し、効果不十分と判断される場合は積極的に600 μ g/日へ増量を検討するべきである。重篤なSEもなく、長期にわたり使用可能な薬剤であるが、1ヶ月程投与することで消化器症状が再出現する症例があり、消化管閉塞の進行によるものか薬効の減弱によるものかの判断は今後の検討課題である。

第10回 日本緩和医療学会（平成17年6月30日～7月2日）



会員発表紹介

片麻痺患者におけるインスリン自己注射手技指導の1症例

湖東総合病院 薬剤科
平泉 達哉、長谷川 和泉、鈴木 あさ子、須田 秋彦、金 久仁夫

今回、インスリン導入目的に入院となった片麻痺患者に対し自己注射手技指導を実施し、良好な結果が得られた症例を経験したので報告する。

症例は63才男性。脳出血の既往により左痙性片麻痺状態で、生活は妻と二人暮らしであった。脳外科定期受診時に著明な高血糖が認められ内科へ紹介、インスリン導入目的に教育入院となった。入院時、空腹時血糖 270mg/dl、HbA1c11.3%と高値であったが、合併症の所見はみられなかった。入院直後より食事療法に加え、インスリン療法（ノボラピッド 30MIX：朝12単位、夕6単位）が開始された。初回指導時、患者本人は片麻痺のため介護者である妻に対し指導を行った。しかし妻の理解度が低く手技習得に困難が予想されたほか、妻の仕事の関係から連日朝夕の注射介護は不可能であると思われた。一方患者自身は治療に対し意欲的であり、変化ステージ分類は準備期であった。そこで、片手でも操作できる補助器具を作成し、患者本人に対し自己注射手技指導を行った。その結果、補助器具による手技を習得し、良好な血糖コントロールが得られ退院となった。在院日数は22日間であった。更に退院後のHbA1cが、治療開始1ヶ月で8.0%、3ヶ月後には5.7%と著明な改善がみられたことから、退院後も食事療法に加え継続的に自己注射が行われていたことが示唆された。従って本症例では、補助器具作成による自己注射手技指導が有用であったと判断された。

一般に身体的および精神的に障害がある患者でのインスリン導入時は、介護者による注射が行われるケースが多い。しかし糖尿病の療養は、自己管理の実行度が重要となる場合が多いことから、患者背景や退院後のADL自立を考慮した指導が必要である。今後は、薬剤師による糖尿病療養への積極的な介入が必要であると思われた。

第103回 秋田県農村医学会（平成17年7月9日）

インスリンの凍結によるキット製品の操作不具合について

秋田組合総合病院 薬剤科
白根 江里子、伊藤 郁恵、吹谷 佳奈子、伊藤 紫野、
平泉 美奈子、川村 浩樹、福岡 英喜、安保 忠明

当院では、パスに従い薬剤師がインスリン指導を行っている。この度、患者から寄せられたインスリンキット製剤操作不具合のクレームをメーカーに調査依頼した結果、凍結が原因であるとの回答が得られた。そこで、内容を基に、同様の条件下で検証を行い、インスリン注射を行っている患者への指導として活用することを目的とした。

【方法】 インスリンキットを凍結させ、凍結前後・解凍前後の製剤の状態を観察した。

【結果】 凍結によりインスリン容積が増大し注入ピストン棒のズレが生じた。解凍後に気泡の存在が確認された。凍結により、インスリン結晶の凝集が起これ、解凍後は沈降速度が速くなることが判明した。

【考察】 適正な操作法の指導のみならず、凍結事例の情報提供、凍結の確認方法等について、患者自身による製剤管理意識を養うための教育も指導項目に加えることにした。

第103回 秋田県農村医学会（平成17年7月9日）

会員発表紹介

当院における薬剤師病棟業務 第8報 - デュロテップパッチの使用症例(耳鼻科) -

平鹿総合病院 薬剤科
齋藤 由里子

【目的】癌疼痛治療は、モルヒネが中心的な役割を果たしてきたが、デュロテップパッチの発売に伴い、経口投与不能例や副作用などでモルヒネの継続投与が困難な例において、貼付剤の選択が可能となった。当院でも平成15年3月に採用となり、その使用例は増加している。今回、罹患部が投与経路と一致し、経口摂取困難な耳鼻科領域での、デュロテップパッチ使用症例について検討したので報告する。

【結果】デュロテップパッチ採用から平成17年5月までに耳鼻科で使用されたのは20症例であった。いずれも経口摂取困難な患者症例で、デュロテップパッチに切り替えている。切り替え時、デュロテップパッチの血中濃度が上昇するまでの導入初期と、安定期の突出痛に対してレスキュードーズが必要となった。20例中7例においてはレスキューを必要としない良好なコントロールが得られた。また、レスキューを必要とした例の中では、レスキューの使用回数の増加により、モルヒネの持続注射とデュロテップパッチとの併用に切り替える例もあった。麻薬服薬指導を行うにあたり、フェイススケールなどで患者の疼痛評価を図っている。

第103回秋田県農村医学会 (平成17年7月9日)

カンデサルタン・シレキセチルの腎障害回避の一例

秋田組合総合病院 薬剤科
川村 浩樹、伊藤 郁恵、吹谷 佳奈子、白根 江里子、
伊藤 紫野、平泉 美奈子、福岡 英喜、安保 忠明

カンデサルタン・シレキセチルを含むアンジオテンシン受容体拮抗剤(ARB)は、降圧剤として有用であり第一選択剤として使用される事が多い。また降圧作用のみならず、脳・心臓・腎臓などの臓器保護作用を持つ事が知られている。

しかし、過度の腎障害時での併用は増悪傾向に働いてしまうとの報告もみられる。

今回、シスプラチンによる腎機能低下をきたした患者にカンデサルタン・シレキセチルを併用したことにより、腎機能が悪化したと思われる症例を経験したが、カンデサルタン・シレキセチルの服用中止および処方変更により、腎機能の悪化を早期に回避する事が出来た。

薬剤管理指導業務における薬歴・相互作用および臨床検査データの関連性を認識させられる一症例であった。

第103回 秋田県農村医学会 (平成17年7月9日)